

考古学のための民具1・瓦

Material Cultures of Routine Work for the Archaeological Study (1) : Roof Tiles

渡辺 誠 (WATANABE Makoto)¹⁾

1) 名古屋大学大学院文学研究科

Departments of History and Geography, Graduate School of Letters, Nagoya University

Abstract

The roof tiles have been used to the temples, castles, and commoners' houses from ancient times, so to study them is one of the main archaeological themes. It is necessary to collect the modern roof tiles as the basic data for the following study. The shapes of roof tiles differ in the location of the usage, and its difference is due to the type of the excavated buildings. For the time being, we must collect the complete roof tiles to compare the broken ones. Our collections of roof tiles are not sufficient for this purpose, yet it is of great importance that they are composed of the samples from the Ryukyu Islands and Korea besides Japan mainland. The collections contain the valuable Korean making tools of roof tiles.

I. 考古学のための瓦コレクションの意義

瓦は古代以来寺院・城から庶民の住宅に至るまで様々に用いられているため、考古学の主要なテーマの一つとなっている。そのための基礎資料として、現代の民具である瓦を収集しておく必要性は次のとおりである。

瓦は使用される位置によって形態の違いがある。その違いは建物の性格によっても変化がある。したがって発掘された建物の性格を検討するうえでは、まず正確な現状を知っておく必要がある。またその前提として、しばしば破片として出土する瓦の全形を知るうえでも、完形品の比較資料を基礎資料として備えておく必要がある。

この目的を達成するためには、本コレクションは必ずしも十分ではない。しかしながら若干の特徴が無い訳ではない。それは、本州の資料の他に琉球・韓国の資料が含まれていることと、韓国の特徴的な製作道具が含まれていることである。

資料総数は37点で、内33点は瓦、4点は製作用具である。その内訳は、本州の瓦20点、琉球の瓦5点、韓国の瓦8点、製作用具4点である。

なお、記載に当たっては、1：名称と若干の説明、2：採集地または寄贈者と年月日、3：法量などの順に記す。また挿図・写真の番号は資料番号と一致させている。

II. 愛知県豊橋市曾我瓦寄贈の瓦

各形態ごとに1点ずつ全14点寄贈して頂いた本資料は、大型の鬼瓦などを除き、ごく普通の民家で使われて

いる各種の形態をほぼ網羅している。1986年9月30日，受贈。

次にこれらを順次紹介する。すべて土瓦で，灰黒色を呈す。

資料1. (第1図1, 写真1-1)

1: モッコケン (木瓜剣) の1。軒先に用いる瓦で，カラクサ (唐草) とよばれる。

3: 長さ30.0cm, 幅30.3cm, 高さ9.0cm。

資料2. (第1図2, 写真1-2)

1: モッコケン (木瓜剣) の2。

3: 長さ32.9cm, 幅30.0cm, 高さ10.5cm。

資料3. (第1図3, 写真1-3)

1: タレケン (垂剣) またはフトケン (太剣)。資料1・2と異なり，文様がない。

3: 長さ33.0cm, 幅30.0cm, 高さ10.3cm。

資料4. (第1図4, 写真1-4)

1: メイタ (目板) またはヒラ (平)。もっとも多く生産される瓦でナミガワラ (並瓦) とよばれる。いわゆる棧瓦である。

3: 長さ29.7cm, 幅29.5cm, 高さ6.5cm。

資料5. (第2図5, 写真1-5)

1: ミギハフ (右破風) またはフキハジメ。

3: 長さ29.4cm, 幅26.5cm, 高さ8.8cm。

資料6. (第2図6, 写真1-6)

1: ヒダリハフ (左破風) またはフキジマイ。

3: 長さ30.2cm, 幅30.0cm, 高さ9.0cm。

資料7. (第2図7, 写真1-7)

1: ミギキザミ (右刻み)。

3: 長さ28.0cm, 幅26.2cm, 高さ11.0cm。

資料8. (第2図8, 写真1-8)

1: ヒダリキザミ (左刻み)。

3: 長さ28.3cm, 幅27.4cm, 高さ10.6cm。

資料9. (第2図9, 写真1-9)

1: ヒノボシ (紐熨斗)。次のアツノシの前面に突起が2つ付く。使用される場所はアツノシと同じ。

3: 長さ26.5cm, 幅23.8cm, 高さ5.5cm。

資料10. (第2図10, 写真1-10)

1: アツノシ (厚熨斗)。軒にのせる瓦である。5, 7, 9, 11段と積む段数は多様であり，家が高いほど高く積む。豊橋では長さが8寸2分で，高浜では8寸6分，7分とやや大きい。ムネ (棟) とよばれる。また側面に文様のあるものをマツカワノシという。

3: 長さ24.8cm, 幅21.6cm, 高さ4.0cm。

資料11. (第3図11, 写真2-11)

1: フスマ。ノシの上のにのせる瓦でカンムリとよばれる。フスマ，エド，ハコの3種類がある。フスマは断

面がカマボコ形で、キョウブスマともよばれる。

3：長さ27.8cm，幅22.7cm，高さ10.3cm。

資料12. (第3図12, 写真2-12)

1：エド（江戸）。使用される場所はフスマと同じ。断面形が半円形である。

3：長さ26.6cm，幅17.4cm，高さ6.3cm。

資料13. (第3図13, 写真2-13)

1：ハコ（箱）。使用される場所はフスマと同じ。断面形は家形である。

3：長さ27.3cm，幅27.5cm，高さ14.7cm。

資料14. (第3図14, 写真2-14)

1：ツボまたはヒボマル（紐丸）。ハフの内側の機部に縦1列にのせる。形はエドを少し大きくしたものである。

3：長さ26.8cm，幅21.5cm，高さ9.7cm。

Ⅲ. Ⅱ 以外の瓦

曾我瓦寄贈以外の採集品を記す。採集地の詳細は一点を除き不詳であるが、愛知・岐阜県下ではある。資料16のみセメント瓦で、他は土瓦である。

資料15. (写真2-15)

1：花瓦の1（波瓦ともいう）。

3：長さ36.5cm，幅28.9cm，高さ6.5cm。

資料16. (写真2-16)

1：花瓦の2。

2：岐阜県中津川市落合河野典夫氏寄贈。1986年3月11日。

3：長さ32.4cm，幅27.8cm，高さ6.1cm。

資料17. (写真2-17)

1：雪止め瓦。

2：岐阜県中津川市落合・民宿髭田・島崎久男氏寄贈。1987年7月9日。

3：長さ30.6cm，幅30.6cm，上面と先端部に鉛色の釉薬がかけられている。

資料18. (写真2-18)

1：棧瓦。

3：長さ28.4cm，幅28.6cm。

資料19. (写真2-19)

1：棧瓦。

3：資料18に同じ。

資料20. (写真2-20)

1：棧瓦。

3：資料18に同じ。

Ⅳ. 琉球の瓦

本州と異なる琉球瓦の特徴は、赤瓦とよばれ橙褐色を呈すること、軒先はすべて滴水瓦であること、そしてやや小型で、屋根上ではしっくい留められていることなどである。

2点の寄贈品と、3点の採集品がある。

資料21. (写真2-21)

- 1：軒丸瓦。文様はソテツの花。
- 2：沖縄県島尻郡与那原町・奥原瓦・奥原崇実氏寄贈。1987年3月5日。
- 3：長さ34.6cm，幅14.0cm。

資料22. (写真2-22)

- 1：滴水瓦。
- 2：資料21に同じ。
- 3：長さ24.2cm，幅23.6cm，高さ11.4cm。文様はソテツの花。

資料23. (写真3-23)

- 1：丸瓦。
- 2：沖縄県久米島久志川村内間殿内にて1987年3月3日採集。
- 3：長さ31.0cm，幅15.5cm。

資料24. (写真3-24)

- 1：平瓦の1。
- 2：資料23に同じ。
- 3：長さ25.7cm，幅22.7cm。

資料25. (写真3-25)

- 1：平瓦の2。
- 2：資料23に同じ。
- 3：長さ25.3cm，幅21.8cm。

Ⅴ. 韓国の瓦・製作用具

金星瓦寄贈の瓦4点・製作用具3点，韓享俊氏寄贈の瓦3点・製作用具1点，康南窯業寄贈の瓦1点，合計12点である。すべて土瓦である。

資料26. (写真3-26)

- 1：軒丸の滴水瓦。
- 2：ソウル特別市江南区三成洞所在金星瓦の任五赫氏寄贈。1987年5月。
- 3：長さ40.2cm，幅14.8cm，高さ14.8cm。文様は韓国の国花ムゲンファ（ムクゲ）。

資料27. (写真3-27)

- 1：滴水瓦の1。
- 2：資料26に同じ。
- 3：長さ41.5cm，幅32.7cm，高さ17.8cm。文様は龍。

資料28. (写真3-28)

- 1：滴水瓦の2。
- 2：資料26に同じ。
- 3：長さ37.8cm, 幅30.2cm, 高さ18.8cm。文様はムゲンファ（ムクゲ）。青緑色の釉薬を施釉。

資料29. (写真3-29)

- 1：棟飾りの瓦。
- 2：資料26に同じ。
- 3：長さ33.3cm, 幅16.2cm, 高さ35.4cm。犬様の飾りで、その頭部破片が沖縄県那覇市泉崎の湧田古窯址（17世紀初頭）から類例が出土している（写真5参照）。

資料30. (写真3-30)

- 1：瓦当面の木型の1。
- 2：資料26に同じ。
- 3：高さ24.1cm, 幅31.9cm, 厚さ3.0cm。文様は龍。

資料31. (写真4-31)

- 1：瓦当面の木型の2。
- 2：資料26に同じ。
- 3：高さ16.6cm, 幅16.3cm, 厚さ4.3cm。まんじと寺名。

資料32. (写真4-32)

- 1：瓦当面の木型の3。
- 2：資料26に同じ。
- 3：高さ15.0cm, 幅13.4cm, 厚さ3.9cm。文様は亀甲船。

資料33. (写真4-33)

- 1：軒丸の滴水瓦。
- 2：全羅南道長興郡安良里芽嶺面，人間文化財・韓享俊氏寄贈。1989年10月6日。
- 3：長さ36.4cm, 幅15.2cm, 高さ14.5cm。

資料34. (写真4-34)

- 1：滴水瓦の1。
- 2：資料33に同じ。
- 3：長さ37.0cm, 幅24.8cm, 高さ8.5cm。

資料35. (写真4-35)

- 1：滴水瓦の2。
- 2：資料33に同じ。
- 3：長さ35.5cm, 幅25.5cm, 高さ9.0cm。

資料36. (写真4-36)

- 1：製作用具のピョンジャン（コマ）。粘土板を切る時の目盛（写真6参照）。
- 2：資料33に同じ。
- 3：タテ・ヨコ各5.0cm, 厚さ2.0cm。

資料37. (写真4-37)

- 1：軒丸の滴水瓦。
- 2：全羅南道康津郡郡東面虎溪里・康南窯業寄贈。1988年10月7日。
- 3：長さ35.7cm，幅15.2cm，高さ16.7cm。

VI. 瓦の歴史と標本の必要性

瓦の起源地は、地中海東部と中国とに大別され、前者は平らでルーフ・タイルの名称にふさわしい。その影響の東限はインドである。後者は断面が彎曲し、中国の戦国時代（B.C. 5～3世紀）に出現する。中国語ではワ、韓国語ではキワ、日本語ではカワラとよび、伝播ルートを明示している。

日本へは飛鳥時代（A.D. 7世紀）には伝わり、次第に定着するが、その歴史は次の3時期に分けて考えることができる。

第1期：朝鮮半島古代三国より瓦が伝播した飛鳥時代以降。

第2期：滴水瓦の伝播や量産体制を示唆するコビキBに代表される近世初期以降。棧瓦の発明や、類焼防止のため大都市で庶民層まで瓦屋根が広がったことも、この時期の特徴である。

第3期：喫茶店などの第三次産業の建物にヨーロッパ系の瓦が盛んに使われる敗戦後。

これらの3時期を通してみれば、それぞれの時期における対外関係と、瓦使用建造物の階層性は明らかであり、技術の導入もそれぞれの政治的・社会的な背景をよく反映している。

中国に始まり日本へ初めに伝わった瓦は、平瓦と丸瓦とを組み合わせる屋根に葺かれるが（第4図a）、両者を結合させた棧瓦は江戸時代に日本国内で発明される（同c）。前者は本瓦葺きとよばれ今でも伝統的な建造物に使用されているが、後者が一般的である。

この瓦本体の形態とは別に、瓦当面が大きく倒三角形になる滴水瓦（同b）は、A.D. 6世紀に北部中国に出現し、韓国へは14世紀、日本へは16世紀末に伝播する。平瓦・本瓦より成る最初の瓦とは、伝播の時期に大きなズレがある（第5図）。日本へは豊臣秀吉の侵略戦争を契機に伝播し、後に棧瓦へも取り入れられ花瓦・波瓦などとよばれ（第4図）、東海地方へは伊勢湾台風以後に普及する。

滴水瓦の形態的な特徴は、1：瓦当面が倒三角形を呈する、2：本体と瓦当面との角度が直角ではなく120度であり、そのため製作技法も若干異なってくる。そのことを知りたいと思い韓国での調査を行ったのであるが、文化財的建造物の瓦を製作している金星瓦の任五嚇社長は、滴水瓦の機能を次の3点に整理して説明してくれた。

1. 装飾性。
2. カラフルで華麗な垂木の、雨水からの保護。
3. 雨水のまくれ防止。

形態上の特徴はこの3点すべてに関連することで、伊勢湾台風以後の普及は特に3と深い関係がある。特徴の2は1の装飾性との関係が深い。瓦当面が大きくなった分だけ直角のままだと不安定に見える。軒先での屋根勾配は約30度であるから、これを加えて120度にし、地面に垂直にすることが必要になってくるのである（写真7）。

平面に置かれた型に垂直に本体をたてて接合する瓦作りに対して、どのように120度を保って作るのか、このことが韓国調査のポイントであった。そして日本と異なり上下逆にして、30度の傾斜で斜めにたてかけて瓦当

面を継ぎたし、その上に型をあてて叩く。最後にはみだした粘土を切りとる作業をみて、大いに納得した（写真8）。

一方、滴水瓦が直接中国の明朝から伝わった沖縄の場合は、瓦自体が小型なため、一部を斜めに切り、伝統的な倒立の方法で製作している。資料21には御教示くださった奥原崇実氏が説明的に記した鉛筆の痕が見られる。本州で倒立させる方法が消えたのは、日本化したことと、花瓦・波瓦のように倒三角形が小型化し、直角のままでもよくなったからである。

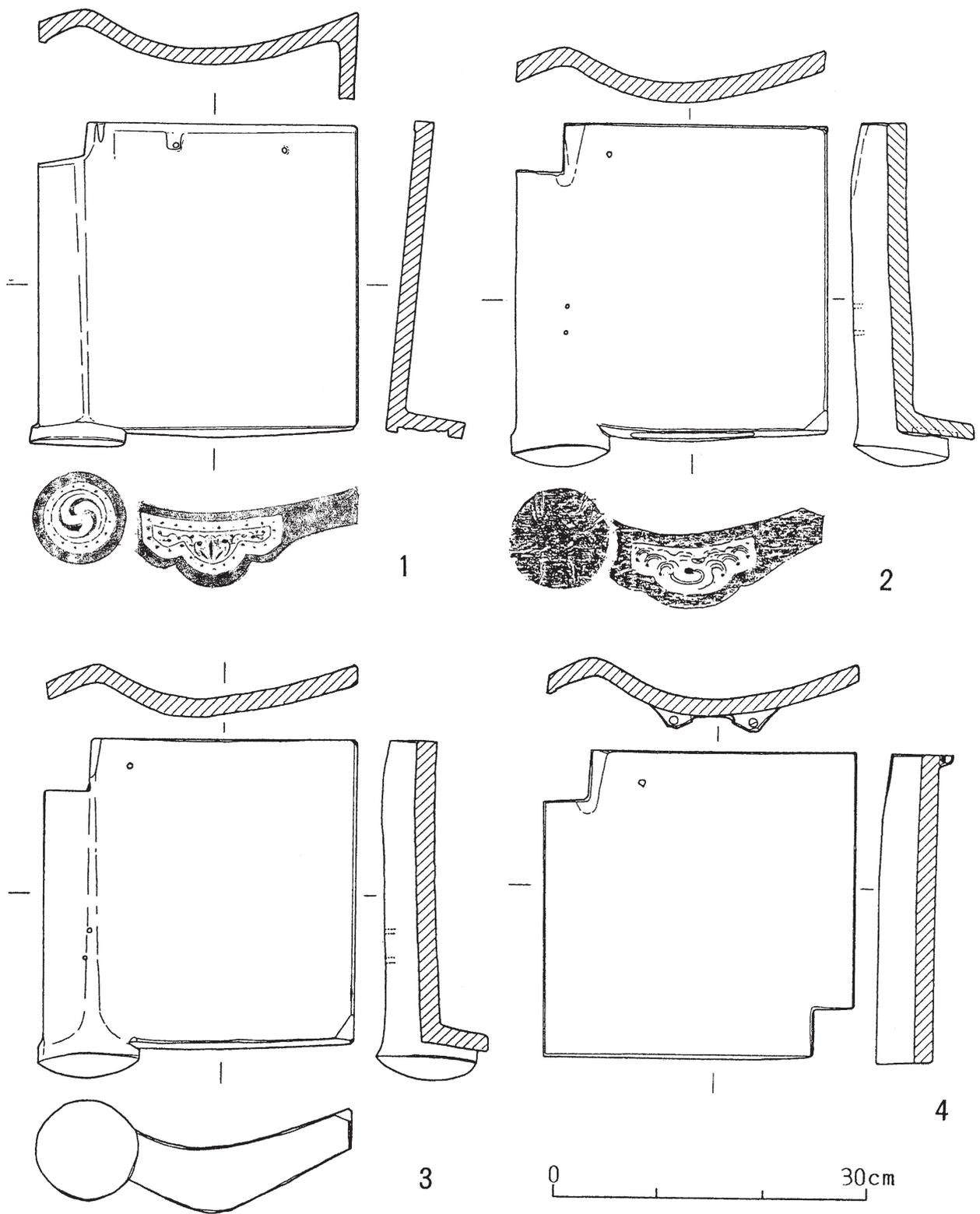
歴史的な研究は最終目的であるが、その大前提としてモノとその技術的な研究は不可欠であり、その知識を共有するために標本が必要不可欠なのである。

関連文献目録

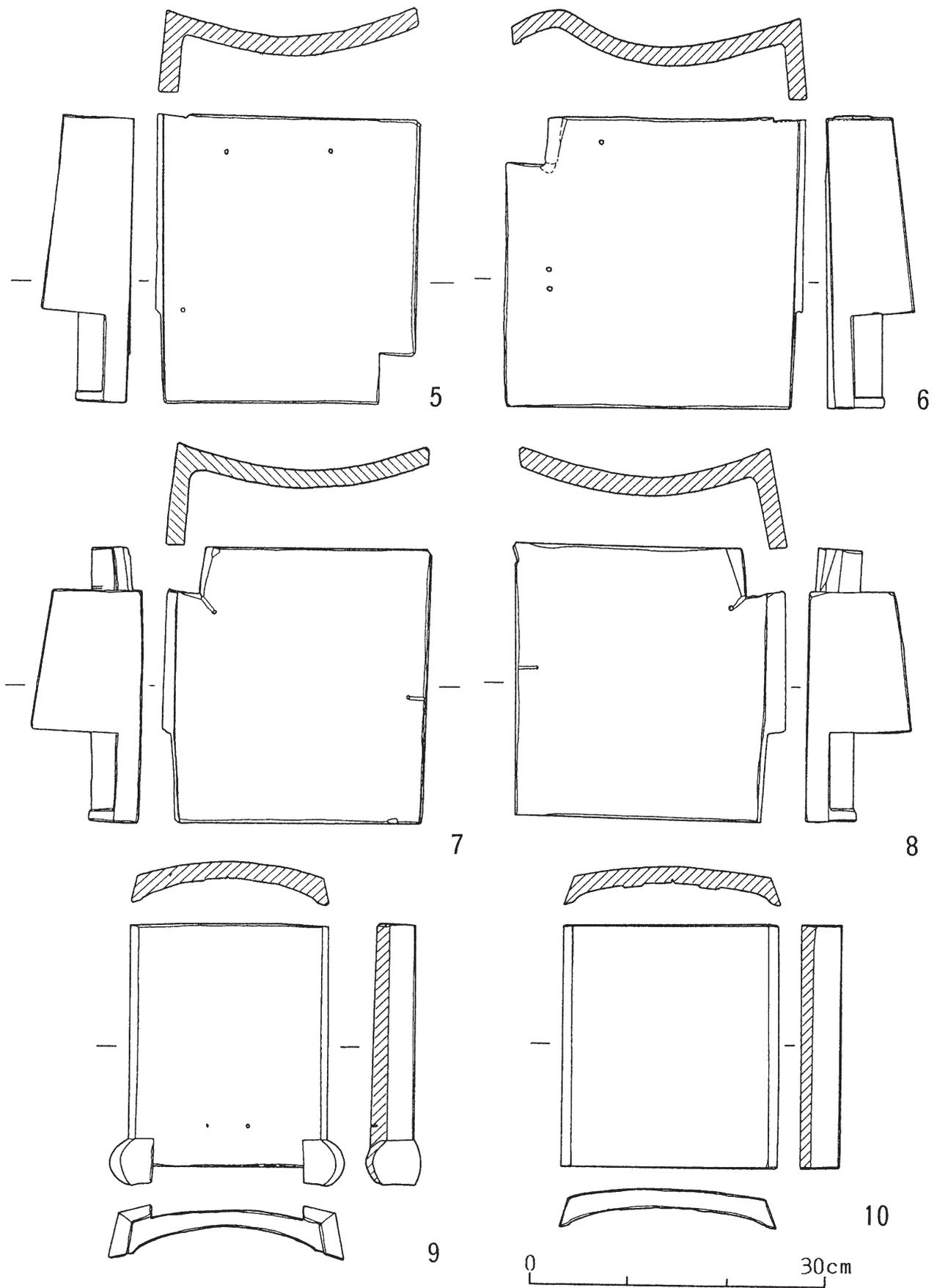
- 渡辺 誠，1988：高麗瓦の製作技法について。名古屋大学文学部研究論集，史学34. 181～191頁。
——，1990a：滴水瓦の製作技法について。同上，史学36. 131～148頁。
——，1990b：滴水瓦の伝播とその背景。考古学ジャーナル，326. 2～5頁。
——，1991：瓦と木綿—東アジア的視点で—。歴史と民俗，8. 95～109頁。
——，1995：日韓交流の民族考古学。名古屋大学出版会。

謝 辞

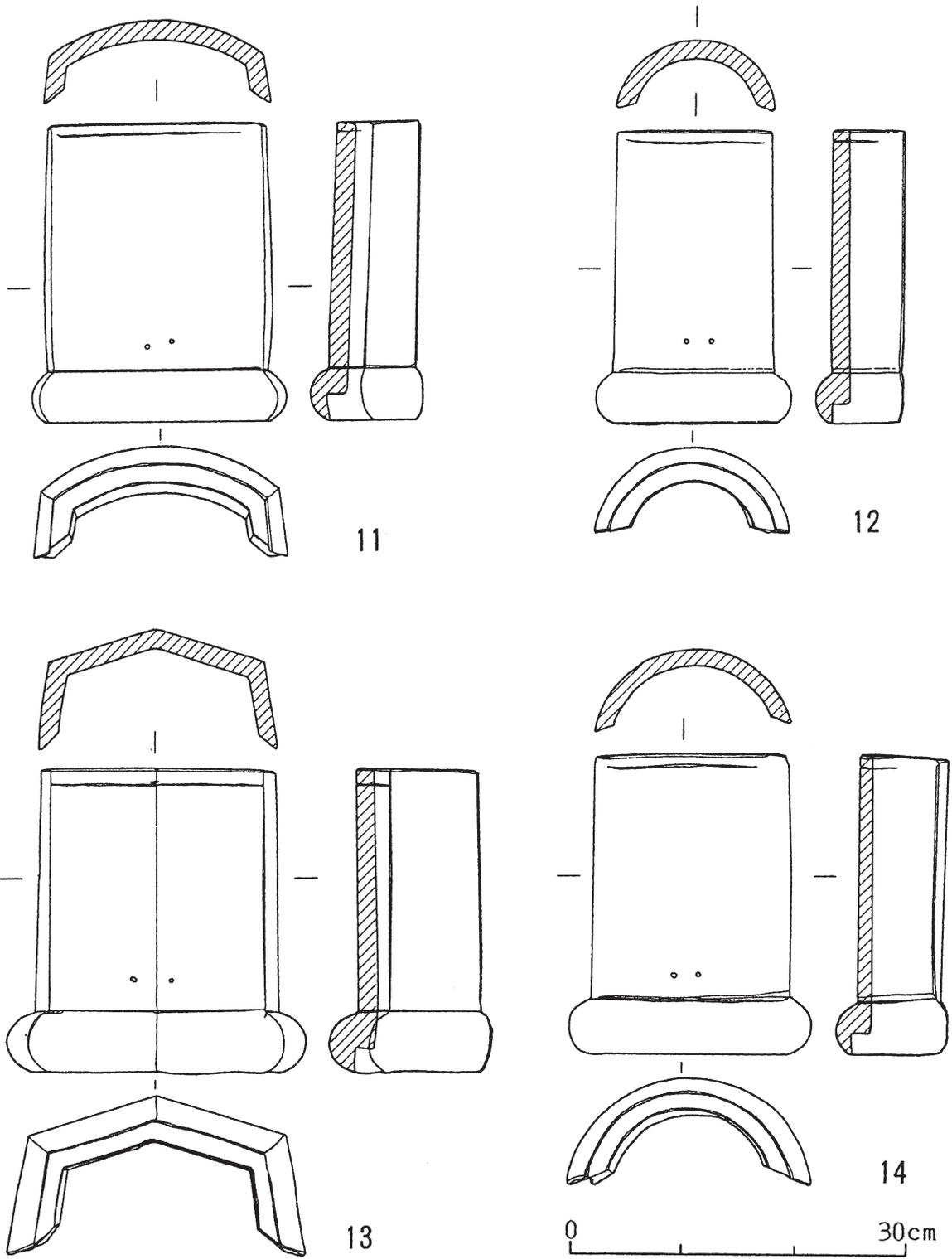
本稿をまとめるに際しては、文学研究科大学院研究生の岡田 賢・吉田泰幸氏，大学院前期課程学生の平山紋子氏に御協力を仰いだ。明記して謝意を表する次第である。



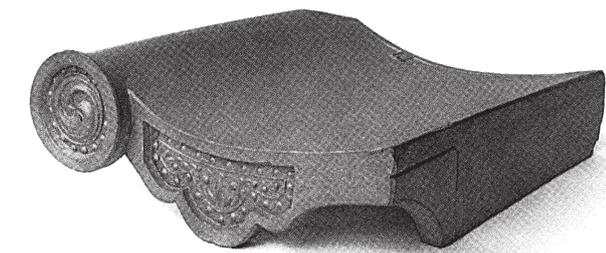
第1図 曾我瓦寄贈瓦実測図1 (番号は資料番号, 以下同じ)



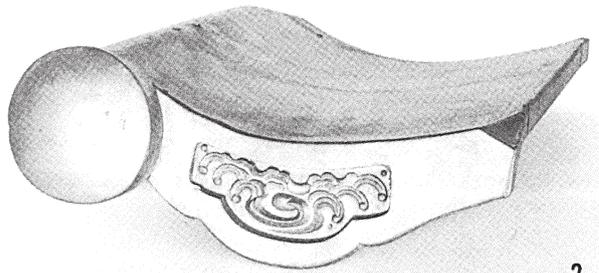
第2图 曾我瓦寄贈瓦実測图2



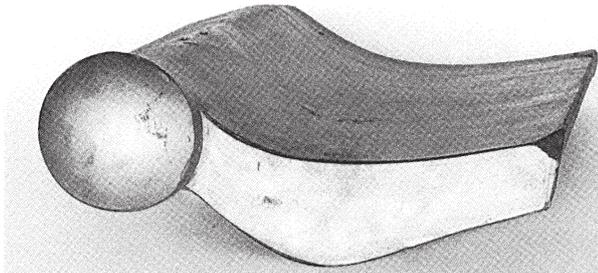
第3图 曾我瓦寄贈瓦実測図3



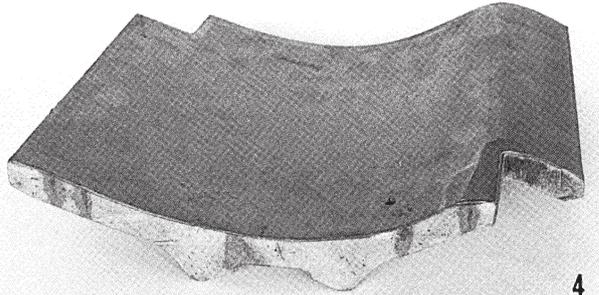
1



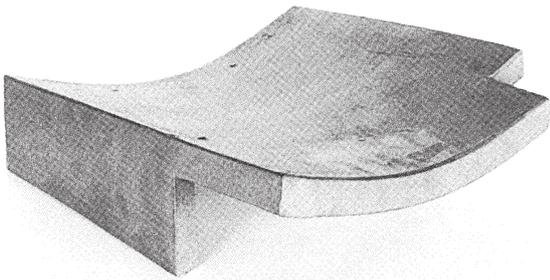
2



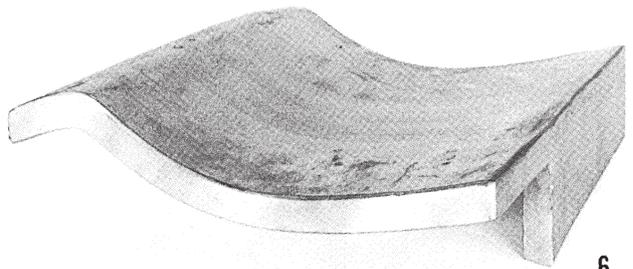
3



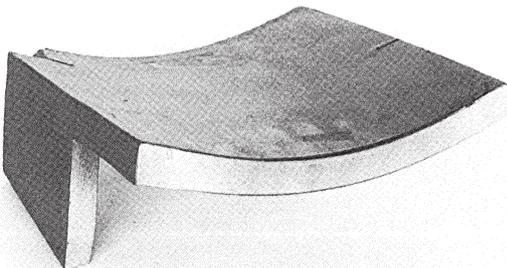
4



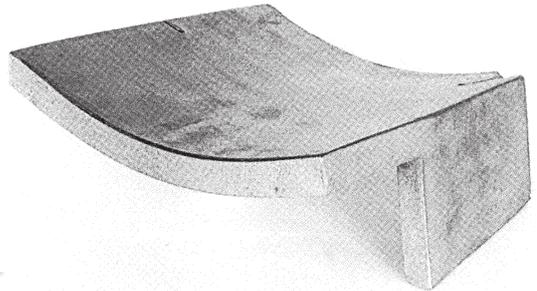
5



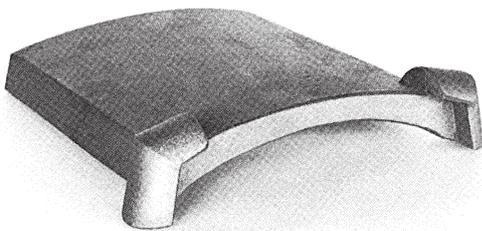
6



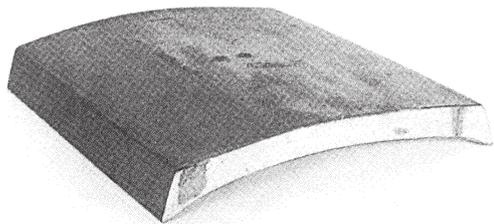
7



8

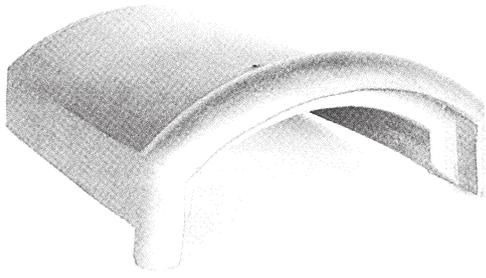


9

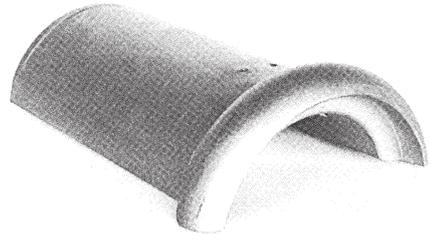


10

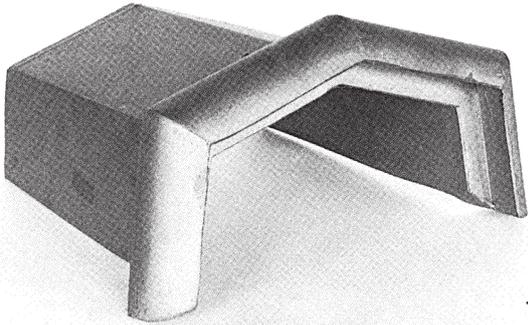
写真1 瓦1 (番号は資料番号, 以下同じ)



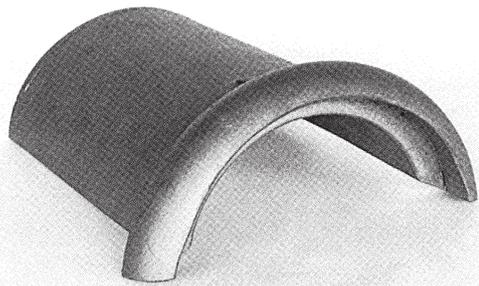
11



12



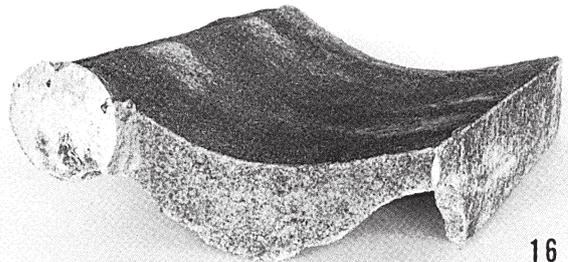
13



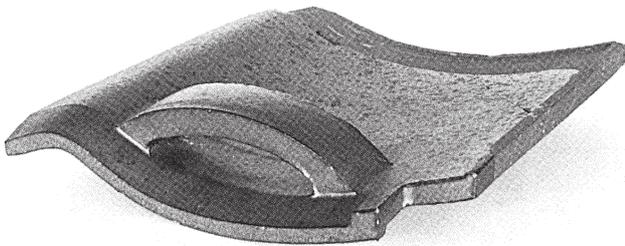
14



15



16



17



18-20

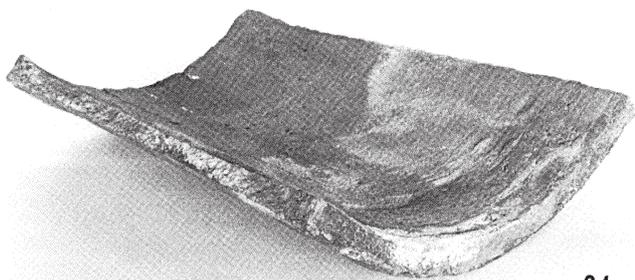


21

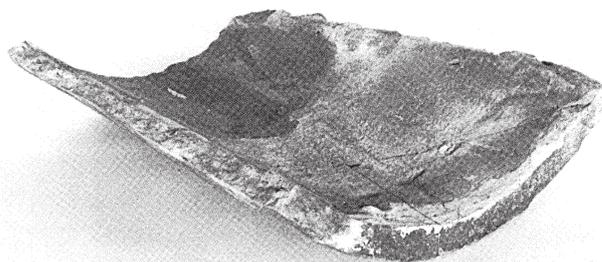


22

写真2 瓦2



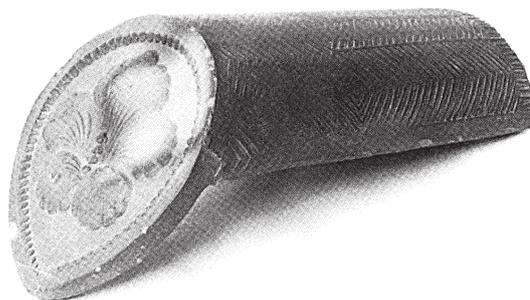
24



25



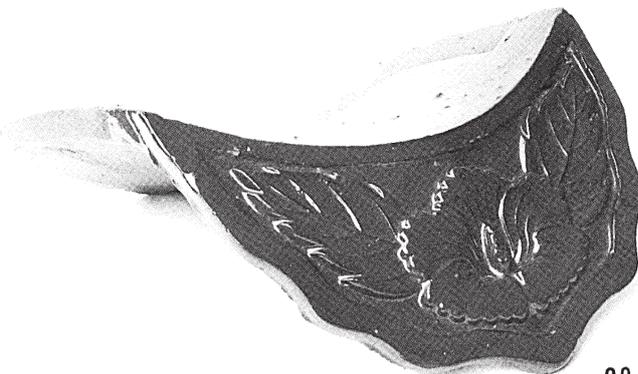
23



26



27



28



29

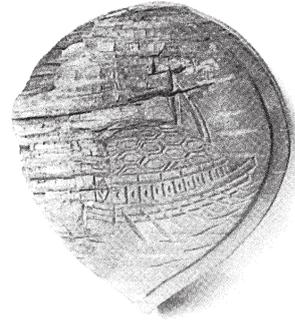


30

写真3 瓦3 (製作用具を含む)



31



32



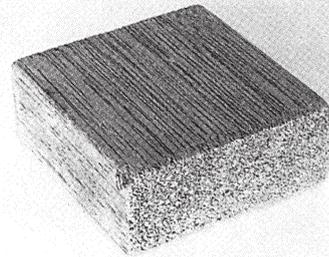
33



34



35



36



37

写真4 瓦4 (製作用具を含む)

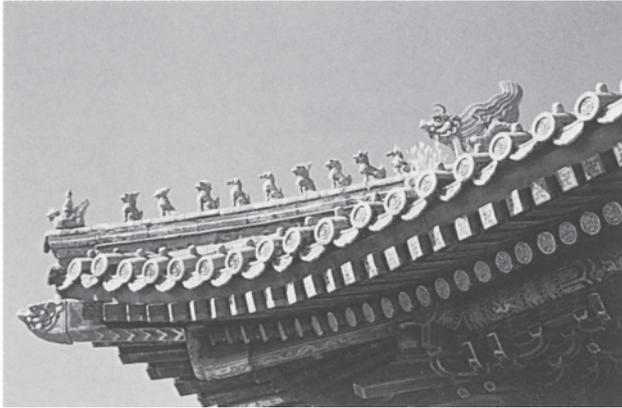


写真5 棟飾り (北京・紫禁城)

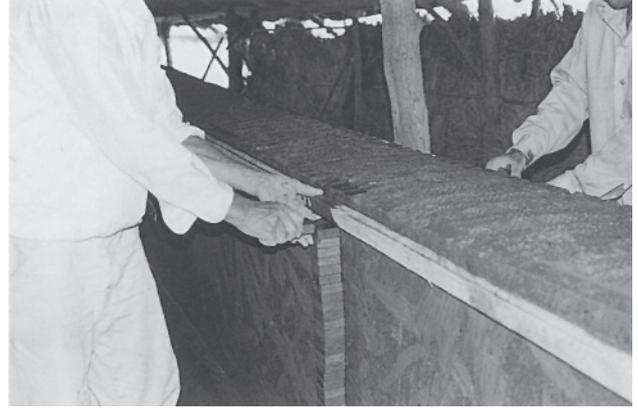


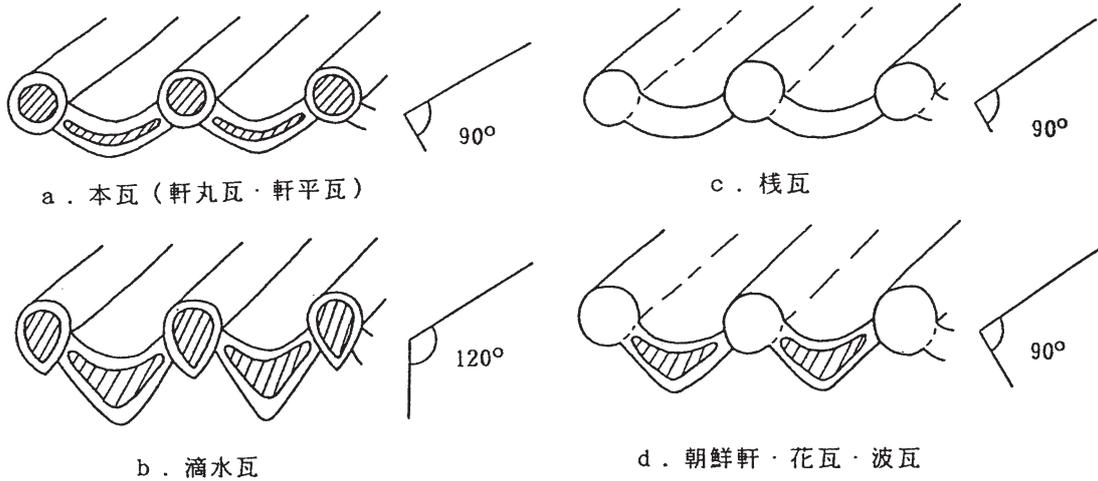
写真6 コマの使用光景



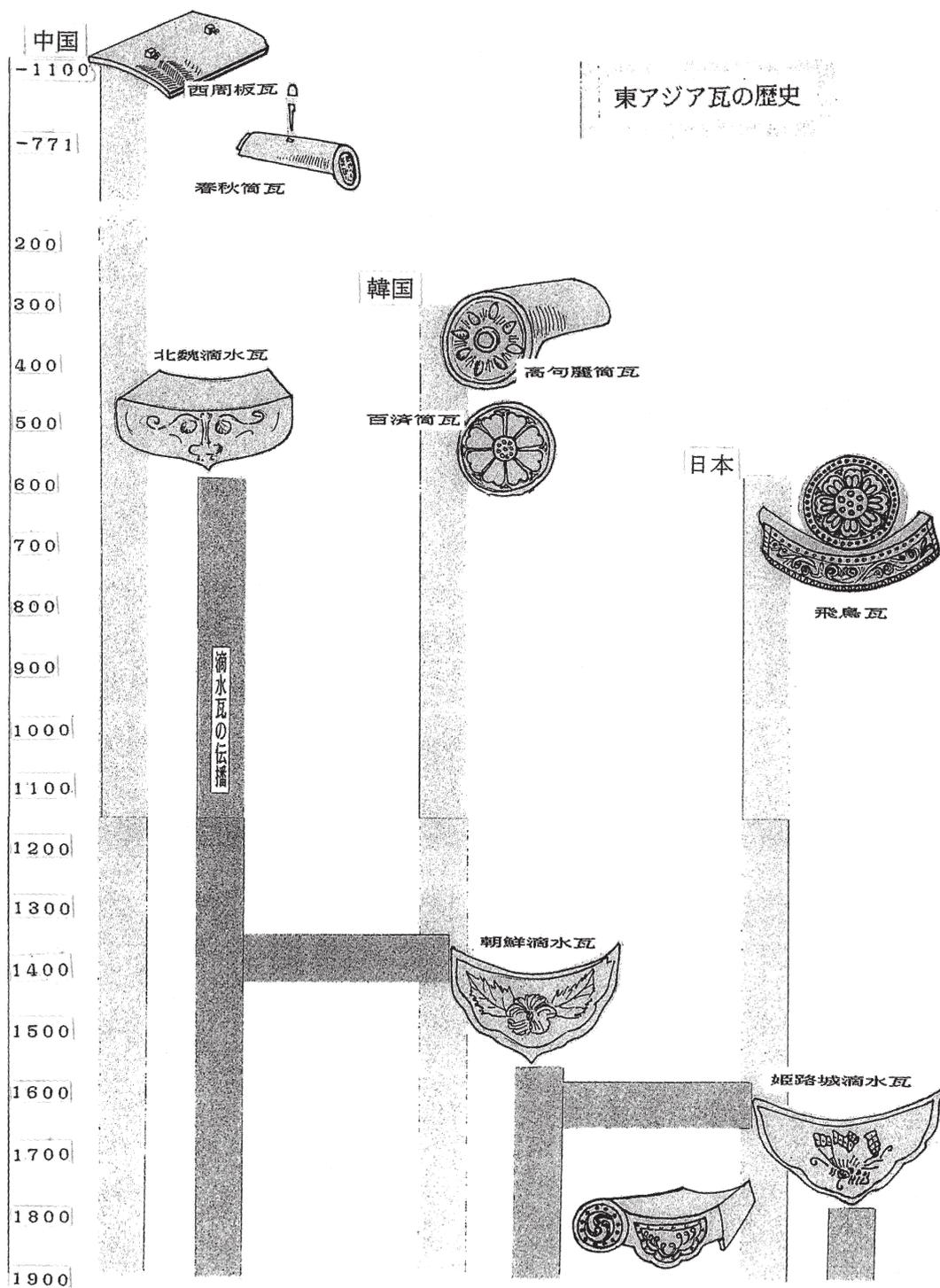
写真7 滴水瓦と垂木



写真8 滴水瓦の型を叩く作業



第4図 軒先瓦の種類



第5図 東アジアにおける瓦の変遷（熊海堂氏作成）